教育課程実践モデル事業 EAST通信 第13号（H30.2.22）松江東高等学校

【中間報告会の特集　第2弾】

１月２５日（木）に開催した平成２９年度「教育課程実践モデル事業」実践研究校中間報告会及び研究授業について、第 11 号で研究授業の内容を、第 12 号では中間報告会の特集第１弾として講評を紹介しました。今回はアンケートの一部を紹介します。

中間報告を聞いた感想では、全校体制の必要性を感じる反面、の難しさを感じているものや、めざす具体的な生徒像を共通理解することの重要性を感じたことに加え、それを教員間だけでなく、生徒とも共有することの大切さを感じたものが目につきました。

いずれにせよ、授業改善の必要性をほとんどの教員が感じていることが窺えました。それが一番の成果だったように思います。

中間報告会全体を通じて　～所属教員のアンケートより～

全体評価　３．３（所属教員３．２）　※中間報告に関しての全体評価３．２（所属教員３．１）
［評価値　大変参考になった４　参考になった３　普通２　参考にならなかった１］

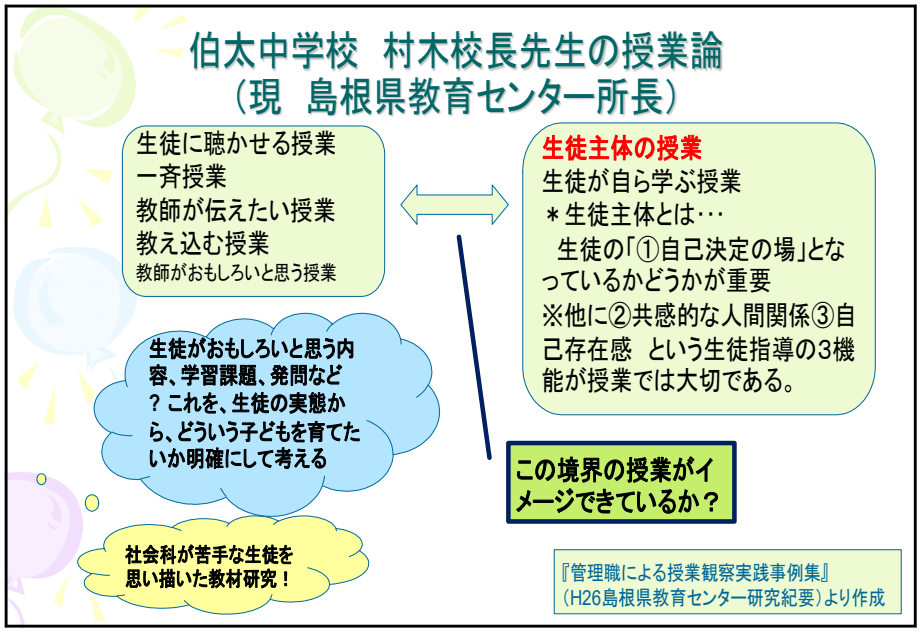
●手段が目的化しているところがある。**主体的な学びとはどのような学びかということを具体化する必要**がある。
●授業改善という重いテーマに関して、気軽にグループで話すことができた。
●作問演習を効果的にする方法が分かった。パフォーマンス評価は難しいと感じた。グループが全体で発表することにはあまり意味がないということには驚きを持った。
●**グループ協議は有意義**であった。
●教科の人数が少ないので、**指導方法や指導案を共有できる環境**が欲しい。
●なかなか教職員で授業改善について話す機会がないので、短い時間でもこういう時間がやはり必要だと思った。今後もこういう活動を積極的に取り入れてほしい。
●同じグループの**他教科の先生方と意見交換をする時間が持ててよかった**。
●グループワークを通して、他教科の現状、課題、目標を知ることができた。私たちのグループでは、**教科を越えた** TT 授業を提案したが、いつか実現させたいと思った。横のつながり、縦のつながりを持ち、**各教科がバラバラに進むことなく**生徒に寄り添った学習目標や課題設定ができればよいと思う。
●授業改善について考える良い機会となった。同じ思いを持っている部分、違う部分が、話し合いの中で知ることができ、参考になった。また、運営指導委員の先生方のお話を聞き、**できることから変化に向けて、まずは自分が変わることが大切だと感じた**。
●授業改善に向けた取組を浸透させていくにはどうすればいいかということを、他の先生と話しながら考えを深めることができ、大変参考になった。今後、松江東高校の生徒に向けてどのような授業をして、どのような力を身につけさせたいか、日々多くの先生に相談しながら考えていきたいと思った。
●グループで話し合いをする中で、他の先生方から新たな視点をいただけた。
●「今の授業の何がダメなのか」を論点に話すことは、最近なくなっていたと感じた。その点をフェアな関係で互いに突き詰めることも大切だと思った。
●少し専門用語や難しい言葉が多すぎて、何が大切かが分かりにくいところを感じた。勉強不足を感じた。**とにかく考えさせれば良いということではなく、場面場面に応じたことが必要である**と再認識できた。様々な情報を得て、少しずつ改善し、よりよい授業をしていきたい。
●今回は３教科が中心だったが、他の教科や自分の教科だとどのようにするのかについて、他の先生方からいろいろな話やアイディアが聞けて参考になった。
●**特別支援**コーディネーターをしているが、**その取組を授業改善にどのように組み合わせていくか**と思うと、やることがまだまだあると課題の多さを感じた。
●人それぞれ考え方が異なると思った。それをまとめていくのが自分であり、よりよい授業につながると思った。

教科を超えた取り組みや情報共有は有意義であり必要である、との意見が多かったように思います。だからこそ、カリキュラムマネジメントをより一層機能させ、授業改善のすすめ方を研究しながら、学校全体での取り組みを明確にしていくことが大切となります。

そのためにも、教科会だけでなく、教科主任会や学年会などでの情報交換も今後密にして行く必要が

あるでしょう。また、学習の意義を生徒が本当の意味で理解した上で、生徒と教員がめざす方向を共有していくことも重要だと言えそうです。

今回、アクティブ・ラーニングについての誤解が解けた先生もいたようです。「この方法を取り入れなければアクティブ・ラーニングではない」とか、「すでにグループ活動を取り入れているから大丈夫」というのでなく、そもそも手段が目的化していることに気づけたことは大きいと思います。



主体的な学びとは、自分から言われなくても学習するという意味ではないはずです。一人一人が考えをしっかりともち、またその考えを表明する場が保証されることではないでしょうか。また、対話的な学び、協働的な学びとは、グループ学習などの学習の形態を意味するものではなく、考えを共有する場が保証されており、そこで自己の考えと他者の考えを比べることで、自己の考えが更新されることではないでしょうか。さらに、深い学びとは、知識が関連づけられ構造化されることであり、多くを知ることではありません。例えば、社会科では、記述的知識、分析的知識、説明的知識、概念的知識、規範的知識などいくつもの知識が重層化・構造化されていることを意識していなければ、良い学習課題はできません。今回多くの先生が気づいたり、感じられたことを形にしていく次の１年でありたいものです。

【島根大学の学生と本校１年生とのワークショップが開催されました】

２月１５日（木）４限、島根大学の学生と本校１年生（11Ｒ）とのワークショップが開催されました。生徒にとっての目的の一つは、「ルーブリックを用いた自己評価を試行し、自分の良さと課題を発見すること」でした。

１年生は、前日の人権講座で、「『自分を知る』～すべての心を大切にするために～」というテーマで臨床心理士の小村俊美先生にお話をきき、その中でおおまかに自分がどういう特性を持っているのかをプロファイルしていました。自分がどういう人間なのかを知り、そこから今度は相手をどういうふうに見るのか、どのように付き合っていくのかを考える講座であったので、ワークショップでの自己評価の試行もすんなり受け入れられた部分があったと思います。

教員は、ワークショップの中で生徒が課題を遂行している様子、つまりパフォーマンスをルーブリックに照らして評価しました。知識・技能の活用がどの程度図られているか、理解はどの程度深まっているか、思考・判断・表現はどの程度なされているか、主体的に学ぶ姿は見られるかなど、質的に評価するのが一般的な基準です。今回は「多様性を理解する力」、「コミュニケーションする力」、「協働する力」が評価の観点でした。こうした評価は、これからの授業改善では必ず必要となってきます。

ルーブリックがあることは、課題意識を生徒・教師双方で具体的にもてることや、学習中のセルフチェックと修正ができることなどの多くの利点があります。今回は、本人の評価とそれを見取る側の評価との違い、見取る側も教員だけでなく、学生、大学の教官も評価を行い、それぞれの違いなどを見ることも一つの目的でした。この取り組みを通じて、学校全体で共有できるルーブリックの作成につなげていければと思います。